HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく : 第2報 さくらさんへのインタビューから
Author(s)	松田, 康子; Matsuda, Yasuko
Citation	臨床教育学研究, 9, 108-125
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84297
Type	journal article
File Information	SiCRoHDaE9.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

投稿　事例研究論文

「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく

―第2報、さくらさんへのインタビューから―

松田康子

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものであり、第一報に続くものである。本研究は、精神障害を生き抜く“さくらさん”の生きられた経験に学ぶ事例報告である。方法は、非構造化面接を用いたインタビュー法を用いた。本研究は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。つまり、ケアの担い手として応答せずにはいられない、物語の発見にある。今が一番幸せというさくらさんは、病気のことを常に意識していて、周りから後ろ指指されないように、毎日毎日、楽しく過ごせたらいいな、と語っていた。さくらさんの物語は、病いを生きるわけではなく、病気になって得た、「何もなしに終わる」かけがえのない今の暮らしを生きることの意味を、ケアの担い手に教示するものであった。

キーワード：多様性　精神障害　生き抜く　質的研究

はじめに

本論は、「精神障害者は病や障害をいかに生きているのか」という研究の主幹となる調査の一端を報告するものであり、第1報の報告に続くものである（松田2019）。調査は、一人一人のユニークな「生きられた経験」を聴きとり、語られた物語から「多様性を認め」合うケアの視点を考察することを研究目的としている。ケアの視点とは、教科書にあるような模範となる解答を記述するのではなく、ケアの担い手として応答せずにはいられない生きられた経験の意味の発見にある。

本研究の問題意識は拙著にてすでに記したが、再度ここに要約をする（松田2018）。

日本において精神障害者当事者の物語の収集と分析研究がされるようになったのは、1990年後半からのことである。ここを始点として現在に至るまでの、日本の関連文献レビューを行った結果、精神障害者当事者の物語に関わる研究は、素朴な問いから始まる事実の集積から始まってはいるものの、事実の集積を十分に積み上げる前に、研究者が聞きたいことを聞く研究や研究者や社会が望む仮説の検証に向けて動いてきたことが導かれた。また、精神障害者が地域で暮らし続ける物語を記す質的研究には、モデルストーリー化によって、多様さへの認めがたさを結果として招く恐れがあることも導かれた。これは、精神障害者へのケアリングを論じた拙著（葛西2006）においても、成長の意味を曖昧なままに、自身の成長に向かって主体的に人生を「生き抜いて」いくモデルを前提としていたことは否めず、同様の過ちを犯してきたといえる。筆者は自戒の念を込め、近著において（松田2018）改めて、多様さを認め合う社会の創出が求められていく社会の変化が期待される

＊まつだ　やすこ　　北海道大学教育学研究院

現在であるからこそ、やはりモデルストーリーから脱却した多様さにひらかれたストーリーとして、改めて事実の集積が研究において求められていることを述べた。

こうした問題意識により、一人一人の物語を丁寧に扱うことを志し、第１報では、インタビューという方法を用いる一事例報告という形を試みた。本論は、その第２報である。

１ インタビュー調査概要

(1) インタビュー調査の目的と方法

インタビュー調査の目的は、第一に、「当事者が精神障害を抱えて生き抜くとはいかなることか」という問いに基づき、地域生活において精神障害を意識する（させられる）とはいかなることか、その生きられた経験の意味を探求することと設定した。さらに、第二の目的として、「多様性を認め」合うケアの視点、つまりケアの担い手として応答せずにはいられない物語を発見することとした。

インタビュー方法は、文書にあるテーマと「暮らしの中で、関わりの中で病気を意識する（させられるとき）、しないときについて、自由にお話をしていただきたい」と投げかけ、あとは、その場の流れ次第でインタビューが展開する非構造化面接である。今回インタビュー調査に応じてくださったさくらさん（仮名）との面接は２回にわたって合計約２時間行われた。１回目は、上記の問いから始まるインタビューを行い、２回目は、１回目のインタビューの内容を読み上げながら内容を確認する作業において、インタビュアーが自発的に話し出す物語を聞き取る方法をとった。

(2) 分析から論文執筆まで

分析に際しては、まず、分析データをエクセルで作成した分析シートに移行させた。分析シートのサンプルを図１に示す。

分析データ１は１回目のインタビューから作成されたものであり、インタビューの回数が増えるごとに、この分析シートは横に伸び、分析データ２、３、と続くことになる。

ほぼ逐語で示された分析データを、一つの話題の単位で区切り、いくつかに分けられたものを、１つずつ、セルにコピー＆ペーストした。インタビューの流れに沿って上から順番に分析データ内に移していった。また、分析データに記されていたインタビュアーが感じていたことについては、別の列にコピー＆ペーストした。改めてあとから感じたことは、随時この作業をしながら同じセルに加筆していった。インタビュー時とその後との区別をするため、No. の末尾を１と２で表記した。

分析データ２以降の「分析データ２」の列に上から下に縦に並ぶセル内に収められたデータのセットは、横にある分析データ１のセルの内容に沿って、会話順にコピー＆ペーストをした。新たな話題へと膨らんだ場合は、セルを新たに挿入させて会話順にコピー＆ペーストをした。これは、データ確認作業をしながら２回目以降のインタビューを行うので、どこで話題が膨らみ、どこは確認作業のみで済んだかがわかるように表示するためである。この作業の中で感じたことも、「１、感じていたこと　２、感じたこと」の列に加筆した。

以上のようなエクセル表を作成し分析シートを完成させていく一連の作業が、分析の第１段階に位置づく。次の分析にかかる第２段階は、

NO.	分析データ1	コード	NO.	1、感じていたこと、2、感じたこと	NO.	分析データ2	コード	No.	1、感じていたこと、2、感じたこと

図１．分析シートサンプル

事例研究論文の結果の部分を書きながら行った。この際に、意識したことは、自身が心理臨床にて書き続けてきた事例報告のスタイルである。筆者にとっては、身に馴染んだ面接経過の報告スタイルである。この方法については、大きな物語として、その情景が読み手にも伝わるように、再現されるように記述することである。現在、言語化できることはこの程度であるが、今後、これを調査事例研究法と表明し、さらに分析方法について、詳述していく予定を立てている。

（3）インタビュー調査実施までの道のり

個人へのインタビュー調査依頼は、あるフィールドを拠点にして行った。後述するNPO法人すみれ会が運営する地域活動支援センターである。インタビュー調査を本NPO法人本体へ問い合わせ許可を得るまでの道のりの詳細については、拙著に記したとおりである（松田2019）。

簡単に記すと、まず先に理事長に調査説明をした上で、法人の全体ミーティング（利用者が集まりNPO法人が運営する地域活動支援センターの運営を協議する月１回のミーティング）、常任理事会、理事会で説明をし、承認を得ていった。筆者は、全体ミーティングで利用者に向けて調査協力を説明する際に、精神障害を生き抜く、というテーマで研究をしてきていること、だけど、専門家は知らなさすぎると思って20年前から研究調査をしてきたこと、「私も、間違っていたなぁ」と思ってきたこと、それをすみれ会で気づかされたことを話した。ここで教えてもらったことを、書き残したいのですとお願いを申し出た。もちろん「ちょっとでも嫌な感じがあったら断ってください」、「協力したけど、途中でやっぱり嫌な感じになったら、その時も断ってください」と言う説明もした。直接断りにくいときは、指導員の方を通して、気持ちを伝えてくだされればとお願いした。質問もあり、公表の仕方とフィードバックについても丁寧に説明を加えた。説明を終えた後の反応は様々で、申し出が可決されたミーティング終了後は、早速、協力の声がけをしてくれる方もいれば、黙って書類に目を落としている方も、訳あってできない旨伝えてくださる方もいた。

このような手続きにより、NPO法人理事長、構成員そして調査協力をお願いする個人に対して承諾を得た上で本研究は行われている。なお、個人の匿名化作業については加工を施したが、フィールド名称のみ仮名ではなくNPO法人理事長、研究協力者の承諾を得て、実在する名称をそのまま用いた。理由は、研究協力者の生きた証が本フィールドに宿っていると思えてならなかったからである。

（4）インタビュー調査を依頼したフィールドについて

前述した通り、インタビュー調査を依頼したフィールドは、NPO法人すみれ会（以下「すみれ」とする）である。そして、インタビュー協力依頼をした方は（する予定の方々は）、皆、「すみれ」が運営する地域活動支援センターの利用者である。先行研究においても、松田（2019）はフィールド紹介を記しているが、少しだけ時がたった。多くは松田（2019）に依る紹介文であるが、時の経過分、加筆した紹介文を以下に記す。

「すみれ」の歴史は長い。そろそろ50周年を迎えようとしていて、筆者がその存在を知ったのも出入りするようになったのも30年以上前のことになる。「すみれ」は、1970年に当事者の会として発足している。北海道立精神保健衛生センター社会復帰学級卒業生４人でスタートし、1986年に「すみれ共同作業所」が創設されている。これは精神障害者当事者が運営する共同作業所としては全国の先駆けであったことが記されている（河野1995）。さらに1994年には、ところ狭しと利用者で溢れんばかりとなった作業所で、利用者のニーズに応えていくため、「すみれ第二共同作業所」を新たに設立している。

1970年創設から「すみれ第二共同作業所」が設立された1994年までの「すみれ」の歴史は、河野（1995）が詳細に報告している。そこでは「すみれ」の生成と発展の軌跡のまとめとして、「日本の社会構造の中に精神障害者を対等に組み入れることによって、社会を一歩前進させようとしている運動体」であることと、病と障害を抱えつつ制度的差別や社会的偏見のなかで、「仲間を作り、維持・拡大し、協力者をふやしつつ、生きているということ自体が、史上かつてなかった大事業である」と記されている。

その後の「すみれ」は、法律が変わっていくなか、2007年には、NPO法人精神障害者回復者クラブすみれ会が運営母体となって、地域活動支援センターを二つ（第一と第二）引き続き運営する形で現在に至っている。この間、創設時こそ専門家の呼びかけがあったものの、その後の日常的な運営はずっと、精神障害者当事者によって営まれ続けていたことは言うまでもない。利用者や指導員が入れ替わったり、激減したり、先頭に立つものが再入院したり、幾度かの存亡の危機にさらされながら、今も運営主体は変わらない。健常者を雇って運営することを助言されていたこともあったらしいが、健常者が混じると引っ張られ乗っ取られてしまう懸念を抱く人もいるようだ。このような大きな事業を誇りを持って担っている場であるからこそ、現在に至るまで精神保健福祉士や作業療法士、看護師、臨床心理士、公認心理師を志す学生らの実習先にもなり続けている。

そもそもの名前の由来は、「春先に咲くすみれの花はひとつでは目立たない。でもたくさん咲くと、美しいし、力強い」と語り継がれている。理念は「のん気、こん気、げん気」「ひとりぼっちの精神障害者をなくそう」となるだろう。名前の由来のごとく、人が集まる中で様々な活動が積み重ねられてきた実績が、「すみれ」にはある。当事者運動、居場所づくり、働く場所、そして仲間同士のごく自然な支え合い・助け合いである。

運動として成果を上げてきたことでは、障害者を対象とする交通費助成に精神障害者を組み入れていく地道な活動が真っ先に上がる。最初は、関係者すらその必要性を認めずに無謀さを説いたという。同じ建物内には、札幌市精神障害者回復者連合会の事務局がある。略して札回連は、20年ほど前から「我らが主張大会」といって、会員がテーマに沿った主張を述べるイベントを年に１回、現在に至るまで開催し続けている。筆者もできる限り参加をしているが、仲間内だけのイベントになったなぁ寂しいなぁと思う回があったり、マスコミ取材が入り盛況に終わる回もあったりする。

もう一つ、主張というほどオフィシャルなものではなく、より日常の生活の物語を紡ぐような雰囲気として感じられるものに、すみれ会では「語る会」という場がある。開始当初は、縁の深い精神科医が聴き手であったらしいが、しばしの休会を経て、最近では、筆者が聴き手としての役割をあてがわれ開催されている。話の中心になる人を「おさかな」というのが習わしなのだが、静かにその人の話を聴き入る場合もあれば、参加者との対話が活発に交換されるときもあって、シナリオもなく、行き当たりばったりな会である。

最近は、ピア・サポートが退院支援や地域支援実践のなかで評価され取りざたされることも多くなったが、そうした言葉が使われるようになるずっと前から、「すみれ」ではごくあたりまえに助け合い、支え合いが営まれていた。指導員の仕事も分業で成り立っていて、短時間で単位ごと切り分けられた仕事内容を指導員や指導員補佐が担っている。過去の話になるが、用事があって電話をかけても、この分業体制は頑丈に守られていて、担当者がいないとあっさり電話をかけ直してくれと言って電話が切れた。伝言ぐらいしてくれればなあ、と心の中で呟いていたけれど、いつしかそういう環境に筆者も慣れていった。最近、障害者への就労支援の分野では職場環境の合理的配慮ということで、一

つの作業に限定した短時間労働の話が出てくるが、それもずっと前から「すみれ」ではやっていることであって、別に目新しいことではない。

「すみれ」は長年の功績が認められ、最近では、地域精神保健福祉機構から精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）を受賞したり、社会貢献支援財団から社会貢献者表彰をされたりしている。

変化の激しい社会状況や、マルチタスクを求める労働環境の変化、人手不足問題は、「すみれ」にも忍びよってきているように筆者は感じることがある。就労支援事業所間では、利用者の奪い合いが生じているとも聞く。地域活動支援センターであろうと「すみれ」だけが例外であるはずがない。最近は筆者が電話をかけると大概の用事は済むようになった。しかし、用務を依頼する側にとって、それが必ずしも良いとは言えないような気もしている。つまり、１回で用事が済むということは、１人の人が複数の役割をこなしていることにつながっているようで、担う人の負担増が依頼する側としても気になることがある。また、多くの役割をこなす人がお休みだったり、外出（訪問もしている）のときと重なれば、結局は以前と同じように電話はかけ直しになる。それはそれで仕方がない。

法外施設であった作業所時代に代わり、障害者総合支援法の下に位置づけられた地域活動支援センターへの移行によって、実績つまり利用人数と補助金額が連動するようになった。利用人数を気にする所長さんの話を聞いていると胸が痛む。時代の大きな変化の波の中で舵を取る法人理事長や所長さんたちの苦労はいかばかりかと、何もできない、言えない筆者はただただ案じるばかりである。

「すみれ」には節目節目に撮影した写真が飾ってある。「○○さん、若っ」と言って眺めることもあるけれど、「今、どうしているの？」と消息を尋ねる人もいるし、「ああ、このときは元気だった。」と偲ぶ人も増えたような気がする。

かつて、「すみれ」に専門家（精神衛生センター職員）が関わっていた時期、社会復帰学級を卒業した人は最初の頃日曜日に集まることになっていた。けれども、だんだん集まりが悪くなって、利用者がたった一人になったときのエピソードを山崎氏が紹介している（山崎多美子さんからのロングインタビュー2010）。当時関わっていた専門家とは北海道精神衛生センター（現北海道精神保健福祉センター）職員の安達（故人）である。その時、安達は「一人でも集まってくるのは意味あることだから」と言い、どうして集まらないのかみんなに聞いてみようということになったのだという。

年月を経ても、おそらく、法定内の組織となり制度が変わった今においても、またこの先も、「すみれ」に息づく志は変わらず受け継がれていくのだろうと筆者は思っている。

時代が変化し、顔ぶれも変わってきたとしても、それでも、筆者が「すみれ」を訪れ、挨拶を交わし、コーヒーを振舞われ、世間話をし、ときに身の上話を聴いたり、逆に尋ねられたりしながら過ごすひとときは、不思議といつも変わらず穏やかに流れていく。

ここまで言葉を尽くしてはみたが、全くもって心もとない。インタビュー調査を依頼したフィールドである「すみれ」は、筆者のような未熟者に紹介しきれることなど到底できるはずがないと思ってしまう。それほどに筆者にとって、「すみれ」はありがたく大きな存在である。どうしてもこの固有名詞を仮名としてあてがうことができない。筆者にとってもまた、生きてきた証がそこにもあるからなのかもしれない。

(5) さくらさん（仮名）と私*の出会いから調査を依頼するまで

今回のインタビューに協力してくださった方は、そろそろ古希を迎えんとするさくらさん（仮名）である。

*この節以降、筆者の表記を「私」とする。

さくらさんは、私がすみれに足を向けるようになった頃には常連さんとして、そこにいた人だった。そして、いつも、奥の小上がりに身を休めている時にも、少し離れた場所にいても気さくに声をあげて挨拶をしてくださり、私が横で静かに座っていると、ふうっと身の上話をしてくださったり、今までのこと、日々の暮らしの出来事をポツリっと話してくださる方だった。グループホームに長らく住んでいて、ある時、グループホームは「自分の家だと思ってる。」と話している姿がとても私の印象に残っていた。そして、私が返す言葉を、また、そのまま繰り返して応答されるときの、さくらさんのその言葉のリズムが、なぜだかとても心地よく、嬉しくなってくる、そんな人だった。これらは全て断片的だった。それであっても、さくらさんの魅力を知るには、もう十分なくらいだった。けれど、ずっとずっと私は、さくらさんのお話をもっと聞きたいと密かに想い続けてきた。

そのようなわけで、さくらさんには、インタビューを開始する１ヶ月以上前からお願いをしていた。一度、私が、体調が悪くて元気がないにもかかわらず、〈今度、お話伺わせてください〉とやせ我慢して言ったときには、「うん、いいよ～。元気なときにね。」と優しく返してくださるのが、さくらさんという人だった。念願叶って、日にちの約束ができ、私は、その日を迎えることができた。お話を、まとまった時間をとってもらって、伺えるなんて、なんてありがたいことなんだろうと、私は噛み締めながらこの日を迎えていた。

すみれでは、毎日、利用者一人一人、何がしか係りが決まっている。お昼ご飯を50円で用意しているので、食事を作る係がまずある。そして昼食代の50円を集金する係もある。食べる時の机と作業の机は同じ場所にあるので、食後の机拭き係も必要だ。食事を食べれば、そのあと食器洗いも必要になる。当たり前に室内の掃除もある。このほかに、請負作業に関する役割も決まっている。さくらさんは、これらのうちの食器洗いの役割をほぼ毎日担っている。だから、インタビューの約束をする日も、「仕事が終わってからね」というさくらさんの申し出は、ごく自然なこととして私は受けとめることができた。私は、さくらさんの仕事が終わるまで、小上がりの席で他の利用者の人たちとおしゃべりをして待っていることにした。

2 インタビュー結果

さくらさんの仕事が終わって、小上がりの席で少し、みんなと一緒に雑談をして、一休みしてから、インタビューは始まった。雑談の時、なぜか、世間を騒がせている家族内の殺人事件が話題になっていた。そして、その場にいた人たちにとって見知った人が、過去に過ちを犯していることが話題に上っていった。「嫌だねえ、精神障害者が事件を起こしたって言われるの。」と、さくらさんは呟いていた。

そろそろインタビューを、と一声かけ、気前よく「いいよ、どこでも」というさくらさんのお返事を受けて、私は、作業場の端っこの場所に移動することを提案した。この時は作業もなかったからだった。さくらさんは、快く移動を受け入れてくださった。そして小上がりからゆっくりと立ち上がって、ゆるりゆるりと移動を始めてくださり、折りたたみ椅子に、身を沈めてくださった。私とさくらさんは横並びになって、折りたたみ椅子に座った。さくらさんは調査依頼書をお見せすると、すかさずメガネをかけて、目で文字を追っていかれた。

以下、まとまった分析データの引用は前後に１行空けて示す。また、私の発言は〈　〉さくらさんの発言は「　」、発言中に引用される他者の発言は『　』で表記する。

(1) 問いに即答するさくらさん

私が調査依頼書を説明した後に、さくらさんは「例えば、どんな話すればいいのか、教えてくれる？」と尋ねた。私は、依頼書の言葉が伝

わっていない至らなさや申し訳なさを胸に抱えながら、〈日常的に病気のこと、精神障害のこと、どんなふうに、そもそも意識して暮らしているかなーとか、、うーんと。。〉と、もごもご伝えていると、さくらさんはサクッと「意識してなかったら、嘘になるね。」と言い、さらに、「常に意識している。」と応えた。この時、私は、意識しているという言葉を深刻に受けとめ、それが伝わるような相槌をしていたに違いないのだが、テンポよく繰り出されるさくらさんの次の言葉は、「意識してね、毎日毎日、楽しく過ごせたらいいなって思ってる。」だった。

さくらさんの「楽しい」は、今日１日が「何にもなしに終わったなあー」ということで、病気に関しては「常に頭にあるから」こそ、「普通の生活」ができたことが「楽しい」につながるということのようだった。

「周りから、後ろ指さされないように生きていこうと思っている。」

このようにおっしゃるさくらさんに、私は戸惑いを隠せなかった。さくらさんと会っているとき、呑気なことに、私はさくらさんの病気をあまり意識していなかった。そんな自分と、常に意識しているというさくらさんとの意識のズレを初っ端から突きつけられた。私が正直にそのズレを明かすと、さくらさんは「そうして接してくれるのが、一番嬉しいことです」と応答した。

私は、この言葉に救われながらも、もう一方で、即答で返ってきたこれらの言葉こそ、心に留めながら、じっくりとこのインタビューを続けていかなくてはならないな、と思い、この場に身を置いていた。

(2)「何にもなしに終わる」ということが一番楽しい

さくらさんは、グループホームに住むようになって22年ぐらい経っている。グループホームを運営する法人職員の人たちに対しては、「毎日感謝して」、「絶対裏切らないようにしていこう」と思っていて、この話の流れの中で、再び「後ろ指さされないようにして、生きていきたいなーって思っています。」という言葉を重ねていった。

私がすみれに来て、さくらさんと雑談していたときに、グループホームでのお掃除当番話で話が弾むことがあった。それを思い出して、私が話題をそこに向けると、さくらさんの言葉のリズムはさらに弾んでいった。これは、２回目のインタビューでも同じで、静かな確認の場から、おしゃべりモードへの変換をもたらす話題でもあった。

グループホームで当番制になっている食堂のお掃除をさくらさんは、決められた時間をはみ出して、『大掃除みたいな掃除』と言われるほどに隅々まで徹底した拭き掃除をする。椅子に潜って、椅子の脚拭いて、壁、扇風機、窓、サイドボード、ストーブ、換気扇拭いて、網戸も拭いて、テレビも拭いて…拭く場所を聞いていたら食堂の空間配置が頭の中で描けるぐらいの徹底ぶりだ。そして、「手抜きは嫌」だというさくらさんは、掃除が終わると「ほっとする」と話す。

この徹底ぶりと「後ろ指さされないように」はつながっているようでいて、どうしても私にはしっくりこずに、問い返してみると、さくらさんは最近起きた家庭内殺人事件を口に出し、あんなことは、「間違ってもやんない」し、精神障害者が事件を起こしたと言われるのはすごくつらいと話し出し、ご自身の家族のことと自殺未遂の経験を次に語り出した。

(3) 自殺を思いとどまるということ

さくらさんの両親は他界しているが、遠く離れて暮らす姉妹もいるし、ご自身の子ども４人とそして今や孫も２人いる。その話題に触れるや否や、さくらさんは自殺未遂の話を私にしてくださった。自殺を思いとどまらせてきたのは、

他でもない、さくらさんの家族だったからだ。

さくらさんの自殺未遂は２回。最初に思い出したのは、グループホームにいるときのことだ。

「結局、〈うーん〉死んでなかったんだけどね。どうにもなんなくて。なんていうか、安定剤ね、40錠飲んだことある。」

〈うわっはっは、ジャラジャラしそうだ、お腹の中〉

「そしたらねえ、〈ええ〉ふらふらになったの〈はい〉、でもね、食事食べに行かなきゃなんなくて、〈クフっ〉フラフラしながら食べに行ったの。みんなに気づかれないようにって。」

〈死のうとしたこと？〉

「うん。」

〈ご飯食べに、、、〉

「40錠、飲んだら、どうにかなるかなって思ったの。」

〈あっそうか、気づかれないように〉

「うん、気づかれないように、そうっと降りていって。〈うん〉で、食べて、〈はい〉食べて上に上がってきたら、ダウンした。」

〈あっは、あーそれで気づかれて、、〉

「で、朝までずっと寝てた。」

結局、眠くなっただけで「なんもなんなかった」というエピソードである。グループホームに来て、すぐのとき、「友達にね、もう、知らないって言われてね。それでね、どうしようかなって思って」まとめて飲んじゃったのだそうだ。

この自殺未遂の話は、実は２回目のインタビューでも同じように語られた。けれど、さらに過去をさかのぼる１回目の自殺未遂の出来事も添えられた。「どうなるかって思って」睡眠薬を10錠飲んで、そしたら、彼氏に『一昼夜寝ていたんだぞ』、『何やってんだって』びっくりして言われたのだそうだ。当のさくらさんは、目が覚めた時「あぁ、大丈夫だったんだあー」って思ったのだという。私が相槌を打つかのように、〈やっぱり生きていたいって思ったんですかー〉と押し付けがましくいった言葉に対するさくらさんの言葉は、「自分でね。どんなことやっても、死ぬことできないんだなあーって。生きること考えなくちゃダメだなあって。」だった。そして、たまに「どうにでもなれ」って思うけれど、でも、孫もいるし、娘もいるし、迷惑はかけられないという、最初の自殺を思いとどまらせる物語に戻っていった。私は、この話を聞きながら、「彼氏」の存在が急に出てきて、戸惑ったけれど、そこでは触れなかった。

「もう、世の中、嫌になったって思った時」、自殺へと傾いてしまいそうな時に、思いとどまらせてくれるのは家族だということを、さくらさんは次のように語った。

「世の中嫌になったけど、〈うん〉、まだ孫もいるし子どもたちもいるし、まだまだ生きていかなくちゃ、ダメなんだなーって思って。たら、あしたから、また、支援センターに行って、すみれ行って、頑張ろうって、で、考え直したんですよね。あしたから、また頑張んなくちゃ、ダメなんだーって。〈うーーーん〉絶対、自分では死ねないんだって。変な死に方したら、家族がね、〈うーーん〉家族に迷惑がかかるでしょ。娘とかお姉ちゃんとか、〈うん〉妹とか、〈うん〉みんなに迷惑がかかるでしょ。自分で自分の首しめたりしたらさ。〈うんうん〉だから、そういうことは絶対にしないようにしようって。思っています。」

ここに至り、ようやく、さくらさんを「一日一日を大切に生きる」、「何にもなしに終わる」ことが一番楽しいと言わしめる背景に、私は少し近づいた気がして、それを伝えた。それは、自ずと、さくらさんの育ちや家族の物語を語ることへと導くことになっていった。

さくらさんは女ばかり４人姉妹の中で育っていた。今は姉妹も子どもも孫もみな関東にいる。生まれ育ちはより西に下った土地だ。妹さんは

生まれつき心臓病を患っていたけれど、お金がなくて手術ができず、大人になって後妻に入って、義理の子どもを育てているときにようやく、旦那さんが手術をさせてくれて、今は元気に暮らしている。

「私、旦那もいたんですよね」

北海道で一人暮らすようになったさくらさんには、婚姻歴があり、籍も残ったままだった。ある日、その旦那さんが病院で亡くなり、さくらさんに連絡が入った。そのとき、『お母さん心配しなくていいからね』、『全部やってあげるから』といって、娘さんは、葬儀の一切を取り仕切っていた。さくらさんは、「自分で誇れる、子どもがいるなあって思うんです。」とまっすぐに私を見つめて語った。

娘さんとは、19歳くらいから「離れちゃった」。再会のきっかけは、さくらさんが生活保護を申請するときに、離れて暮らす娘さんに問い合わせの書類が届いたことからだった。さくらさんの現住所がわかったとき、娘さんは電話をかけてきてくれて、「開口一番なんて言ったかって、言ったら、『お母さん、産んでくれてありがとう』って言われたんです。」。その何ヶ月後かには、娘さんは日帰りで遠く離れた北海道まで会いにも来てくれた。25年ぶりの再会だった。「嬉しくてねえ。もう、死ぬまで会えないと思ってたから。」と言うさくらさんに、私も思わず〈嬉しいわあー〉と相槌を打っていた。

「いまの、一番の願いは、死ぬまでに1回みんなに会ってみたいなって。それが、夢って言えば、夢だね。〈それがあるから、、、〉それがあるから、生きてるんだと思う。」

〈生きてるし、自分、、で、命断つなんてことしないってことなんで、、、〉

「自分で、どうこうできないし。可哀想だし。あの人のお母さんは、自殺したんだっとか言われたら可哀想だし。そういうふうに言われまいと思って、毎日毎日を楽しく生きたいなって思って。」

さくらさんに自殺を思いとどまらせ、毎日を楽しく生きたいという物語の源泉は、ここにあった。さくらさんは、子どもの頃から生死に関わる病気を持つ妹と暮らし、生き別れた娘や旦那の消息を知る中で、ひとえ二重と生きることの重みを身にまとって暮らしているようなイメージが私のなかに湧いてきた。そして、その場で思わず、〈わあー、命の重みをほんと子どもの頃から、感じて、生きておられたんだなあ、って〉とさくらさんに伝えていた。すると、さくらさんからは予期せぬ言葉が返ってきた。

「なんていうのかな、〈うーん〉病気になったから、こういうふうに考えられるようになったんだよね。自分でね。」

(4) 病気になったから「みんなと同じように生活できるようになった」？

さくらさんは、40代の時に精神科にかかっていて、9年くらい入院をして、いざ退院となっても行くところもなく、住むところを院長と探すところから始めて、今のグループホームにたどり着いている。衣装箱5つ以外、家財道具はなんにもなく、ストーブとか、タンスとか、テレビとか、一つ一つ揃えながら、今の暮らしが整っていった。

さくらさんは、グループホームで暮らすことになって、どうやっていったらいいかと考えた時、「みんなに合わせなくちゃダメだなって、それを一番思って」と語った。グループホームでの暮らしは、合わせるどころか、そばに住む人にお金持って行かれて、騙されてもきたけれど、全てがさくらさんにとっては笑い話と化していた。夜の11時ごろ、『私、お金ないのー』とやってくる女の子に、さくらさんは6、7千

円渡してあげていたら、毎晩来るようになったこともある。積もり積もった額は15万ぐらい。支援スタッフが、いつもお金ないはずの女の子が、最近お金持っているのを訝しんで、さくらさんに尋ね、「あんた、どんだけ人がいいのっ」って怒られて、結局、スタッフが取り立ててくれたのだそうだ。さくらさんは、「怒られてさっ」とこれも一笑に付した。

「私は、なんていうのかな、今が一番幸せだと思ってる。うん。」
〈さっき話していた、病気になって、より、命とか、一日一日を大切にって思うようになって〉
「自分でそう思うようになった。病気になってから。」

もう少し詳しく聞かせて欲しいとお願いすると、さくらさんは続けて入院生活の話を始めた。最初は、大部屋に８人の入院生活だった。「みんなによくしてもらったの。」というさくらさんは、毎年あった運動会競技で走らされた話、盆踊りでは、櫓を組んで太鼓叩いて、浴衣を着せてくれて、地域の子どもたちも参加して、焼きそばとか、焼うどんとかを看護師さんが作ってくれて、ヨーヨー釣りがあったりもして、みんな楽しみにしていた話をしてくださった。２回目のインタビューでも、その郷愁が混じったようなウキウキ感は褪せることなく私に伝わってきた。盆踊りは、参加する地域の子どもたちが少なくなり、病棟改築も伴ってなくなった。それでも、さくらさんが思い出す行事は尽きることなく話題に上がっていった。焼肉パーティ、観光地へのバス旅行、行った先での野外炊事。

「病院、楽しかったしね。」というさくらさんの言葉に、私は少し戸惑った。戸惑いながら、でも、もしかしたら、これがさくらさんのいう「みんなと同じように生活」なのかもしれないと思い始めて、〈なんだろう、暮らしている感じが、しちゃうけど、そう受けとめていい、、、、の、、、〉とためらいがちに尋ねてみた。そのあと、さくらさんは、「はい」と肯定した後に、病院の配膳の仕事をしていると「お正月にね。お雑煮食べさせてくれるんです。それが嬉しくてね。」と話をつないでいった。

さくらさんは「浴衣着せてくれて」と話し、今度は「お雑煮食べさせてくれる」、それが嬉しい、と表されたことが私にとって何より印象に残った。昭和の時代、多くの日本人が家庭の中で、親子の間で四季折々の行事を楽しむ、その一コマの描写だったからだろうか。だけど、病院は治療を目的とする施設のはずだぞ、という思いは、私の次の問いを生んだ。

〈なんか、住むとこ、なかったのに、住むとこができたんですねー〉
「そう。うん。〈それが、病院だった〉それが病院だった。」
〈じゃあ、入院生活、辛い話も聞くんだけど、、、〉
「うん、１年半くらいね。」

入院して１年半ぐらいは、「みんな私の悪口言ってんじゃないかって」病室にもいられなくて、「幻聴と妄想がなくなるまで」は辛かったけれど、それがなくなってから、「病院生活楽しくなった」というのが、さくらさんが語る偽らざる現在の記憶だった。

さくらさんは開放病棟に入院し続けていたにせよ、昔の建物には鉄格子もついていて、精神病院っていう感じだった。それでも、「私たちはね、ほんと幸せだったと思っている。」とさくらさんは話す。病院から逃げ出す人もいたけれど、さくらさんは逃げちゃいたいとは、「思わなかった」。

入院生活で得た人との繋がりは、退院後も続いている。その人が亡くなれば、ご親族にまで及ぶ付き合いが広がっていて、お線香をあげにいったり、香水つけたオシャレな人がひょっこり尋ねてきたり、電話が来たり、年賀状が来たりしている。

私は、さくらさんのいう「後ろ指指されない

ように」という言葉のなかに、こうした繋がりのある人たちへの恩とか、傷つけたくない思いが潜んでいるような気持ちが湧いてきた。私は、それを伝えるために、〈いい出会いをしてきていて、あの、生きていよう、って思いも教えてくれた仲間たちを守る意味が、あるんだなあって〉聞いていて思えたと話すと、さくらさんは、「そう、思ってる。今でも。」と応えた。

〈そういう意識の仕方なんですね。。。ちょっと、学びました。そっかあ。そ…そういう意味で、いつも意識しているよー、って、最初に仰ったんですね。へえーーー。〉
「意識しているよ。本当に。」
〈そういうこと、、、そういうことなんですね。ふーーん〉

さくらさんは、そんなこんなで、９年入院した後、退院してグループホームに入ってから20年近く、一度も入院せずに現在まで暮らしている。「そこだけは、誇れる」と話すさくらさんの誇りは、決して１人だけのものではなく、「みんなが守ってくれるから」なのだ。さくらさんは、病院がなくても困る人もいるわけで、入院が長かっただけに、「自分なりに」考えてきたことだ、と話してくださった。

さくらさんの今は、長い入院生活で紡いだご縁、現在のグループホームにお世話になることでつながった支援センタースタッフと住人たち、そしてほぼ毎日通うすみれの仲間に囲まれている。「すみれ好きなんだっ」と語るさくらさんは、ときに、人生の先輩として利用者の相談に乗り、「一所懸命生きていってね」なんてアドバイスを送ることもある。

「みんながいるからこそ、こうやって生きていられるんだと思う。」

「いろんなことあって、自分でなんていうのかな、みんなに感謝しながら生きてんだけどー。〈うーーん〉たまに考えることあるんだよね。〈ほおー〉自分で、こんな、こんなー、生き方していて、中学出なのに、みんなと一緒にこうやって話していていいのかなって、たまに思うときあるんだよね。」

笑顔を見せながら話していても、こう語るときのさくらさんは、ちょっとしんみりしていた。

(5) 安定が生じ難き暮らし

繰り返しになるが、さくらさんは、２回目のインタビューでも、入院直後の１年半を除けば、「病院生活、楽しかったよ」と話した。私が、でも、死にたくなっちゃうっていうときは、〈嫌な思いしてたからかなってちょっと思っちゃった〉と話を振ってみると、「うん、やっぱり、道央にいたとき、一番辛かった」とさくらさんは漏らした。

「コンパニオンのところに電話して、〈うんうんうん〉明日から、仕事、、、やめますからって、電話して、〈うんうんうん〉で、自分で病気だっての、わかったのでー、で、電話して、〈うーーーん〉で、おまわりさんと仲良くなって、〈アッハッハ〉派出所に遊びに行って、〈ええ、ええ〉おまわりさんに送ってもらって。」
〈えっそれも道央にいるとき？〉
「道央にいたとき。」
〈おまわりさんと仲よかったんだ。。〉
「うん、仲よかったの。」
〈あはは、、、、〉

新たに登場した地名に私の頭の中は混乱した。さくらさんの半生は、いったい？

その半生は、聞けば聞くほどに波乱万丈そのものだった。

ここで、断片をつなぎあわせながら、２回目のインタビューと合わせて、さくらさんの入院前の生活史を紹介しようと思う。

さくらさんの子どもの頃は木登りしたりし

て、お転婆さんだった。父親は中学生の時、東海道新幹線のトンネル工事の事故で亡くなっている。その後、さくらさんは高校進学をせず、すぐに働きに出ている。お姉さんは定時制高校に行っていて、行ってもいいっていってたんだけど、私、「算数1だから、行く学校ないから、行かない」といって進学しなかった。

18の頃には、さくらさんは結婚していた。けれど、旦那さんが仕事で骨折して帰ってきて、当時は、子どもがいて、お母さんがいて、すぐ下の妹がいて、生活費を稼ぐには、さくらさんが働かなくちゃならなくなった。それで、元床屋さんのオーナーが経営するスナックに18の時に勤めることになった。着るものもないので、オーナーさんに洋服買ってもらって、分割であとから払った。「水商売に入って」いじめられたりしたけれど、「考え変えて、みんなに好かれるようにって思って」、40歳ぐらいまでずっと働いて、「子どもたちも、どうにか食べさせていけるようになった」。さくらさんは「そこで強くなったのかもしれない」と言った。

「彼氏」はこの後登場する。なぜ、札幌、道央へ来たのか、私は直接尋ねなかった。語られた事実だけを追うと、さくらさんは、彼氏と一緒に、最初は札幌にいて、その後、道央に移って10何年か、スナックで働きながら暮らしていた。最初の自殺未遂は、道央に住んでいて、精神科クリニックも利用していた時の出来事になる。おまわりさんと仲良しだったのも、この頃のようだ。

なぜか、おまわりさんとのエピソードは、北海道の病院に入院することになった経緯を尋ねたときにも出てきた。北海道、札幌の病院に入院することになったのは、彼氏と喧嘩して、札幌に出てきたことに始まっていた。そこで、友達を頼って家を訪ねたけれど、もういなくなっていて、雨降りの中、さくらさんは、派出所の前を行ったり来たりして歩いていた。そこで、お巡りさんが『何してんの？』と声をかけてくれ、「行くとこない」といったら、女性援助センターに連れていってくれたのだそうだ。同時に病院とも連絡を取ることになって、『1週間我慢しなさい』っていわれたけど、3日目くらいに「我慢できませんっ」、「迎えにきてください」と言ったら、病院が迎えにきてくれた。つまりは入院だった。着の身着のままだったので、入院先で、服とか洗面道具もみんなもらって、「(当時の)院長先生には、一番お世話になった」。

今は、その彼氏も彼氏の親も亡くなっている。

さくらさんは、退院の時のみならず、実は、入院するときも住むところが失われていた人だった。育った家庭も、中学生の頃に、不慮の事故で大黒柱を失い、それからずっと姉妹で力を合わせて助け合いながら暮らしてきていた。18歳の頃にはもうお母さんになっていて、家庭を築いてからも、家族のために働きに出て、水商売の中で、仕事仲間に揉まれて、さくらさんは強くなって生きてきていた。後から繰り返し考えるにつけ、さくらさんの半生は、命が試されているような、安定が生じ難い暮らしの中で生きてきたようにも思えたけれど、さくらさんは、「今までやってきたことは無駄じゃないなあって」、「自分でいろんな仕事をして、やってきただけあって、これだけ、少しは、世の中の役に立っているんだなあって、今、おも…思えるんです」と語っていた。

(6) 病気のおかげで？

さくらさんは1回目のインタビューで「先生とこんな話できると思わなかった」と感想を述べられ、最後の最後に、「やっぱり、一人で生きていらんない、生きていけないっていうのは、ひしひしと感じてます。」と語られた。「周りで支えてくれる人たちいるから、私も68まで生きてきたんだあって」と、回想した。

2回目のインタビューでは、その内容を確認しながら、「たまに怒られることあるけど。」と茶目っ気ある笑顔で、ごくごく最近の出来事が添えられた。よく聞くと、さくらさんがでっかい声を出して怒ったら、逆に怒られたという話

だった。なんでも、雪かき当番を２人でやることになってるのだけど、積雪が７センチなかったら、メインの人が１人で雪かきをするのが、グループホームの決まりごとなのだそうだ。それで、どうやら、ペアを組んでいる人が、何回も何回も「私、手伝いたいんだけど、いい～？」て言ってこられて、もう頭きて「私が一人でやるからいいっ」て、イライラしてさくらさんがでっかい声だして当たったら、逆に怒られたのだそうだ。

爆発もあるし、怒られることもあるのも含めて、〈一人では生きていけない、ですね。〉と確認すると、「そう、怒ってくれるのもね」とさくらさんは返された。

２回目のインタビューの最後でも、入院して１年半は辛かったことを私が再度話題に出しても、さくらさんは同意をするのみで、その話題は引き取らずに、さくらさんは次にように話をつないでいった。

「病気になったからー、、〈んん〉自分のこと、考えられるようになったんだね。」
〈あああ、そういうことかあ。そういうこと、ですか。〉
「んん。病気になったから、みんなに支えられてんだってのが、分かるようになった。」
〈そうかああ、、、そうですか。。。病気、病気、、は、、、、人の支えを感じさせてくれる。。。〉
「うん。周りの人のね。思いやりとか、そういうのが分かる。〈ようになった〉はい。９年何ヶ月、入院して。」

そして、入院仲間で、古い反物を切って巾着を作っているおばあちゃんの話や、麹漬け（北海道の家庭ではよく漬けていた麹を使った漬物は、本州出身者にとって珍しく美味な食べ物だ）を初めて食べさせられた話を、さくらさんは私に美味しそうに伝えてくれた。

１時間を過ぎ、２回目のインタビューもそろそろ終わろうかという雰囲気の中、さくらさんは、お茶をグビッと飲み干してから「病気にならなかったら、こんなことわかんなかったかもしれない。うん。」と改めて語った。私は、ためらいながら、そのとき浮かんだ言葉を口にしてみた。

〈それは、た、、、宝っていいかたしても、いいんでしょうか。〉
「（深い息を吐き出しながら、少し声を潜めて）宝。うん。」
〈あーそうですか〉
「宝だと思ってる。宝物だと思っている。」

一度、腑に落ちたように思えた言葉だったのだけれど、改めて、さくらさんが病気になることで得たことはなんだったのか。考え続けなくてはならない宿題が、インタビューを終えたのちに、私は託されたように感じられた。

３ 考　察

(1) さくらさんの物語をたどる

さくらさんは、「（病気のことを）意識してね、毎日毎日、楽しく過ごせたらいいなって思っている。」と冒頭で即答した。さくらさんにとっての「楽しく」の続きは、「普通の生活」であり「後ろ指指されないように生きる」ことで「何にもなしに終わる」ことだった。“楽しく大切にしたい「普通の生活」の物語”である。

「後ろ指指されないように」というのは、徹底した拭き掃除ではもちろんない。ましてや病気を引け目に思って発した言葉でもなかった。グループホームでの『大掃除みたいな掃除』は、後から思えば、さくらさんにとっての楽しい暮らしの一コマとして象徴的に示されているようでもある。徹底した拭き掃除は、まるで毎日の生活を撫で上げながら大事に大事に慈しんでいるような連想が湧く。「何にもなしに終わる」ことは、さくらさんの波乱万丈な半生を知れば知るほどに、穏やかな暮らしのかけがえのなさ

となって伝わってくる。自殺未遂のあと、「どんなことやっても、死ぬことできないんだなあーって。生きること考えなくちゃダメだなあって。」というさくらさんのつぶやきは、逃げも隠れもできないどん底で、最後に絞り出された言葉のようでもある。自殺を思いとどまらせるのは、心臓病の妹さんや父親の事故死や夫の負傷のなか、命の瀬戸際を生き抜いてきた歴史であり、残される家族の辛苦を噛み締めてきた歴史があって、さくらさんを支えているように私には思えた。さくらさんは、自分も、家族も“コントロールが効かない命の瀬戸際を生き抜く物語”を生きていた。そこには、“不安定な経済生活を生き抜く物語”や“家族の世話をし養い続ける物語”や“世の中嫌になっちゃう（死にたくなっちゃう）物語”も綴られていた。

病気を常に意識しながら楽しく生きるという物語を表面的に受けとめると、精神障害を生き抜く優等生的な返答として伝わるかもしれない。調査者である私に合わせようとしてくれただけで、ちょっと無理しているのではないか、と疑問を持たれる人もいるかもしれない。

しかし、さくらさんにとっての、病気を常に意識しながら暮らす、つまり“精神病を抱えて意識して生活し続ける物語”は、病識を持って、服薬を守って、部屋にひきこもらずに適度に外出をし、生活リズムを崩さずに自己管理をして、などということではなかった。病気になって得た暮らしこそを忘れずに生き続けるという意味がそこにはあるように私には思われた。

さくらさんが、病気になって得た暮らしとは、元に戻るが、住むところが保障された、命を脅かされない穏やかな日々なのかもしれない。入院して１年半こそ、幻聴と妄想に苛まれ辛かったが、その後の暮らしは、四季折々の行事を楽しみ、人々と出会い、睦みあい、その関係は今にも引き継がれている。グループホームでも、怒ったり怒られたり、世話を焼いたり焼かれたり、心配したりされたりしながらも、生活基盤は大きく揺るがされない暮らしがあるといえば、少しそれに近づくだろうか。

さくらさんが今回のインタビューで、語らなかった事柄もあったに違いない。語らなかったというよりは、私が応答できなかった物語というべきだろうか。具体的には、娘さんと「離れちゃった」のあと、私は出奔の物語を頭に浮かべつつも戸惑ってしまい、結局応答できなかった。

こうした私が知る限りの情報をまとめただけという限界はあるが、「世に棲む患者」という論文のなかで、中井（1991）が描いている対人的探索行動の図示を参照し、一部改変して、さくらさんの物語を図２に記してみた。

中井（1991）は統合失調症圏の病を経過した人の社会復帰の側面として、職業の座を獲得することよりも、“世に棲む”棲み方、根の生やし方、つまり安定して世に棲みうるライフ・スタイルの獲得の方が重要とし、社会に座を見つける探索行動（性急に成否をあげつらうことなく）をサポートすることを勧めている。

森越（2016）は「生活のひげ根」について、「一つの中心からひげ根があちこちにのびるように生活を拡大させ、めぐりあいや、ハプニングに開かれた生き方を可能にして、楽観性を保ち続けることである」と紹介している。筆者は、中井（1991）が「世に棲む患者」において記した、対人的探索行動の図示はまさに「生活のひげ根」の図示と受けとめている。図２に描いたさくらさんの物語であるが、中井（1991）から改変した点は以下のとおりである。まず、中井（1991）は基地と記している○はhomeとした。また、中井（1991）であれば、「行動の拡大」と「時間的経過」となっているところを、筆者は生活圏の拡大の程度を明示する座標軸として弧の半径を持ってspaceとし、時間的経過を曲線の長さで時間の経過を示す図とし一部改変をした。

図示をしてみると「生活のひげ根」が、出奔というハプニング？から入院直前において、分岐し増えていつつも居場所（home）を失って

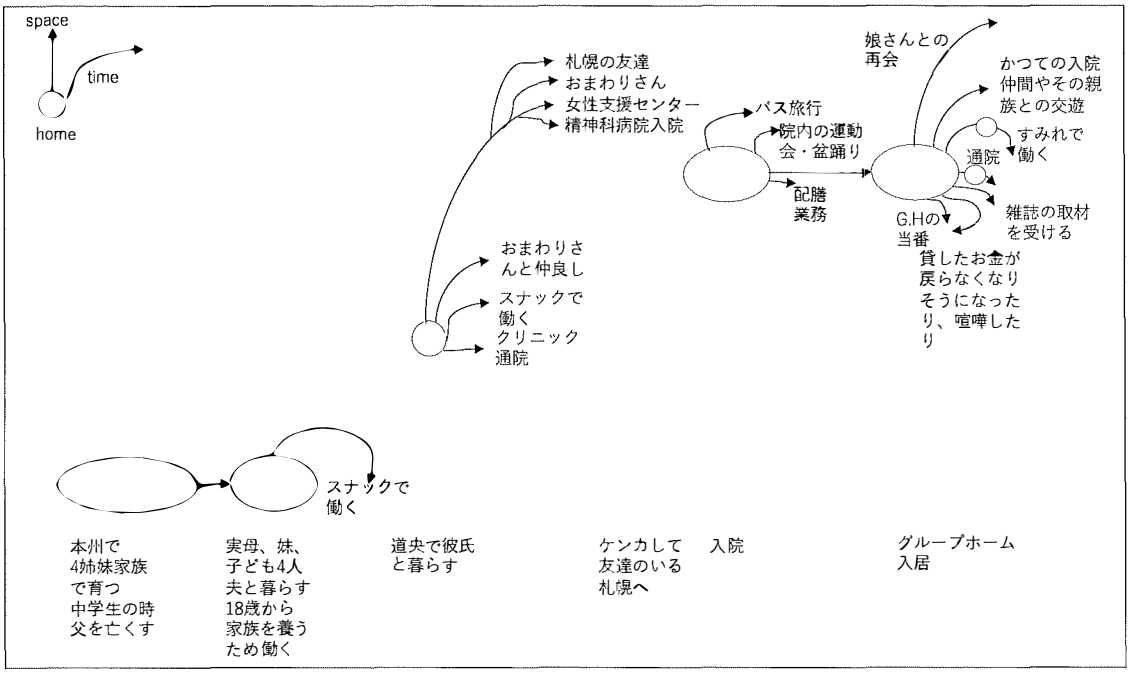

図2．さくらさんの「生活のひげ根」　中井（1991）を参照し一部改変して作成

いることがわかる。また、入院以降に再び、新たな拠点において地固めするかのように、様々な人につながっていくひげ根が複数に伸び出し、基点になるグループホームという居場所（home）に加えて、すみれなどにも居場所（home）を得ている様子を描くことができた。

図をみると、今の今まで、さくらさんは一人暮らしをしてきていないことにも気づかされる。大家族のなかで、集団のなかで暮らしていくなかで、「やっぱり、一人では生きていらんない」とつぶやくには、それだけの歴史の積み重ねがある。子どもの頃は世話を受け、大人になるにつれて家族の命を背負って支えて生きてきたさくらさんは、「病気になったから、みんなに支えられてんだってのが、わかるようになった」と言い、病気になって再び世話を受け、支えられていくなかで「生活のひげ根」を生やしていた。

「病気にならなかったら、こんなことわかんなかったかもしれない。」というつぶやきから、さくらさんが病気によって得たものを類推してみたい。

二十歳に満たない頃から、ずっとずっと家族の支え手だったさくらさんからは、家族のため全てを背負い生き抜こうとする力強い姿が浮かぶ。一方、その後、さくらさんが病気によって得た生活は、出会った人たちに想いを寄せられながら守られ支えられる暮らしだった。「病気になったから、（中略）自分のこと考えられるようになったんだね」というつぶやきは、自己犠牲を伴う利他を捨てて利己的に生きることに気づいたという意味ではない。他者の支えを感じ入りながら、後ろ指指されることなく生き、決して裏切るまいと誓い暮らすさくらさんの姿からは、他者の犠牲の上に立つ利己とは違う生き様が浮かんでくる。さくらさんは、病気になることで、他者の支えやつながりが意識されるようになったからこそ、自分を生かすこともできるようになったのかもしれない。さくらさんの被支えられ経験は、生存の保障をなし、より自分になっていく気づきを得たと言えるだろう。

(2) さくらさんはいかに精神障害を生きてきたか

さくらさんの生きられた経験の物語をたどっていくと、その道のりを指して精神障害を生き抜いてきたといってしまったら誤解を受けてしまいそうな気がしてくる。

さくらさんは「常に病気を意識している」といっていた。しかし、それは病気を生きてきたということではなく、多数派の受け手が、期待しがちな、または思い描きやすい意識のありようではなかった。さくらさんは、病いを生き抜いているわけではなく、病気になって得た、生存の保障とより自分になっていく気づきの物語を噛みしめながら生きていた。

これは、A.W.Frank（1995）が指摘する「寛解者の社会のメンバー」として生き抜くための「医療による植民地化」の結果ではない。それと同時に、脱植民地的な表現とも捉えがたい。着の身着のままたどり着いた精神科病院は、さくらさんにとって、喩えていうならば、難民キャンプ、もしくは難民申請により認定を得て居住する国だったのではないだろうか。入院が決まり診断がつくということは、幻聴や妄想がビザとなり、約９年の長期入院は、１年半後にビザが切れてもなお、永住権をもたらした結果とも捉えることができるだろう。悪しき歴史と捉えられる長期入院（社会的入院）は、治療という名が持つ「慈愛に満ちた植民地化」の破綻そのものであるが、さくらさんの入院後の生きられた経験は、医療による「臨床的還元」によって、個別性がかき消され一般的なものに還元することを許さなかったとも言えるだろう。

さらに言えば、さくらさんには、不条理とも思われる不安定な経済生活による植民地化の物語が、入院前までのサバイバル経験としてすでにあったとも言えるだろう。それゆえに、その後における経験において、さくらさん固有の物語が紡がれているのかもしれない。そして、私が応答することができず語りつなぐことのなかった出奔の物語もあった。

さくらさんは、単に精神障害を生き抜いてきたわけではなかったのだ。

(3) 応答せずにはいられないさくらさんの生きられた経験から学ぶケアの視点

さくらさんの生きられた経験には、さまざまな物語―“コントロールが効かない命の瀬戸際を生き抜く物語”、“不安定な経済生活を生き抜く物語”、“家族の世話をし養い続ける物語”、“私が応答できなかった出奔の物語”、“精神病を抱えて意識して生活し続ける物語”、“世の中嫌になっちゃう（死にたくなっちゃう）物語”、“楽しく大切にしたい「普通の生活」の物語”―が存在していた。

さくらさんは、私が〈宝って言いかたしても、いいんでしょうか〉と口から滑り出した言葉を「宝物」と引き受けた。中井久夫と考える患者シリーズ４では（2018）、東瀬戸サダエ氏が「そうだ！私の病気は財産なのだ！」と他者への尼僧の一喝を目の当たりにして悟ったくだりを綴っている。中井久夫は東瀬戸サダエ氏の著作の書評にて「統合失調症を「私の財産」にしたのは真珠を真珠貝が作るに似た命の営みだと感じてしまう。」と応えている。吐き出しきれない異物が体内にたまり続け、一粒の真珠となり財産をなす時の流れをここに感じとりたい。

ここから学ぶケアの視点として、病気を宝物・財産と言えるような人生を歩めるようにケアをする、などというゴールを設定する気は毛頭ない。

さくらさんの生きられた経験の意味は、「何もなしに終わる」かけがえのない今の暮らしを生きることの意味を、ケアの担い手に教示するものであった。

さくらさんの生きられた経験から学ぶ、応答せずにはいられないケアの視点とは、自分を生かすこともできるようになった被支えられ経験にあると考えられる。それは、生存の保障をな

し、より自分になっていく気づきを得た経験である。ケアの担い手が、いつも意識しているわけではないけれど、ふと、一人じゃないんだと気づかされる、支えられ感を、提供できる環境の一部として機能するということを考えたとき、筆者の脳裏に浮かんだのは、ケアの本質においてメイヤロフがいうappropriate othersであった（メイヤロフ1971）。メイヤロフは、ケアとは成長への助力であると言っているが、これを読み砕いていくとしたら、それは、自分を生かしより自分になっていくということなのであろう。邦訳でappropriate othersは、「補充関係にある対象（他者）」と訳出されている。訳者あとがきにおいては、「他にかけがえのない（人生の）同行者」という言い換えもされ、「補完」ではなく「補充」であることが強調されている（田村・向野198 7）。appropriate othersとは、言い換えるなら、遍路杖にたとえられるような「同行二人」のイメージに重なる。ここにつながっていく学びを筆者はさくらさんの生きられた経験から得たのである。メイヤロフはさらに「私が自己の生の意味を生きているとき、生きることの過程がそれ自体で十分なものと身にしみて感じられる。」と述べる。「何もなしに終わる」かけがえのない今の暮らしに重なるこの豊かさは、appropriate othersというケアの関係性において生じることを示唆しているものと考える。さくらさんの大きな物語は、自分を生かしより自分になっていくappropriate othersとの出会いと暮らし、そして別れの物語でもあった。

さくらさんの生きられた経験から学ぶケアの担い手としてのありようとは、より自分らしくなっていく可能性を広げる環境の一部となるappropriate othersとして機能することではないだろうか。

引用文献

Frank,A.W. /鈴木智之訳（1995/2002）「身体が声を求める時」.『傷ついた物語の語り手』, 第１章, p25-32, ゆみる出版.

葛西康子（2006）『青年期を生きる精神障害者へのケアリング』. 北海道大学出版会.

河野仁志（1995）「精神障害者当事者組織の生成と展開の記録：すみれ会小誌(1970-1994：札幌)」.『北海道大學教育學部紀要』, 65号, p245-269.

松田康子（2018）「精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する批判的検討」.『北海道大学大学院教育学研究院紀要』, 132号, p149-165.

松田康子（2019）「「精神障害を生き抜くとはいかなることか」を多様性にひらく第１報」.『臨床心理発達相談室紀要』, (2), p67-90.

Mayeroff,M. /田村真・向野宣之訳（1971/1987）「生きることの過程はそれだけで十分なものである」,『ケアの本質』Ⅵ, p26, p149-153, ゆみる出版.

Mayeroff,M. /田村真・向野宣之訳（1971/1987）「訳者あとがき」,『ケアの本質』, p232-233.ゆみる出版.

森越まや（2016）「本書ができるまで」.『統合失調症をほどく』, p9. ラグーナ出版.

中井久夫（1980）「世に棲む患者」.『分裂病の精神病理』, ９巻, p253-277, 東京大学出版会.

中井久夫（2018）「書評東瀬戸サダエ「風の歌を聴きながら」」. 中井久夫と考える患者制作委員会,『考える患者シリーズ４統合失調症と暮らす』, 第５章, p243. ラグーナ出版.

東瀬戸サダエ（2018）「統合失調症は私の財産」. 中井久夫と考える患者制作委員会,『考える患者シリーズ４統合失調症と暮らす』, 第２章, p121-122.ラグーナ出版.

山崎多美子（2010）「山崎多美子さんからのロングインタビュー」.『HSK どっこい俺らも生きている　パート４―すみれ会40周年記念誌―』, p11.

謝　辞

本稿は、日本臨床教育学会第９回研究大会にて発表の機会をいただきました。座長そして、ご質問くださった聴衆の方々にこの場をかりてあらためて御礼申し上げます。最後に、本事例

報告をまとめるにあたり、調査にご協力くださったさくらさんとNPO法人精神障害者回復者クラブ「すみれ会」に心より感謝申し上げます。

Openness to diversity: The significance of survivor experiences in relation to mental health issues, trauma and extreme situations Follow-up report: An interview with Sakurasan

MATSUDA Yasuko

This follow-up research report examines the significance of survivor experiences in relation to mental health issues, trauma and extreme situations based on informal discussions with a survivor called Sakurasan. The study focused on the perspectives of openness and recognition of diversity via the unique life experiences of the individual and on the study of narratives relating to the need for responses from caregivers. Sakurasan stated a current state of peace of mind despite a constant consciousness of her mental illness and a desire to live a safe and enjoyable life without constant criticism. Her narrative revealed a precious problem-free existence rather than a life ruled by mental illness.

Keywords : differences and diversity, mental health issues, trauma, extreme situations, survival, qualitative research

＊Faculty of Education, HOKKAIDO UNIVERSITY